

日本の白磁・青磁・青白磁の分類概念

—貿易陶磁分類の歴史を顧みる—

森本朝子
福岡市教育委員会

MORIMOTO Asako
Board of Education Fukuoka City

はじめに

白磁、青白磁、青磁を目視で分類するとき第一に重要な要素はその釉および胎土に含まれる第一酸化鉄 FeO である。その分量が還元炎焼成において白磁、青白磁あるいは青磁としての特徴を表す色を決定する。その分量はおおまかには以下のごとくであるという。

したがってごく単純に白いものは白磁、青いものは青磁であり、白い胎土に青みのある透明釉を掛けた青白磁は両者の中間にあると理解できる。それぞれの典型的な例として白磁は華北の定窯、青磁は浙江の龍泉窯、そして青白磁は

表1 第一酸化鉄の含有量 (%)

	白磁	青白磁	青磁
灰釉・長石釉	0	0.8	1~3
胎土	0	0	0~3

景德鎮の窯が挙げられる。しかしながら厳密に言えば白磁と青白磁と青磁、さらには褐磁も含めて、これらは「鉄呈色の釉のかかった陶磁という」根本的には区別のない一つのグループであるといえる。典型を取り出すことは容易だが、お互いの間に線を引くことは難しく不可能でさえある（内藤匡1975「」内は論文からの引用）。実際には考古学的発掘による出土品には典型例は少なく、むしろこの中間的なものが多いのであって、現場では大いに悩むわけである。

このおよそ無理な問題に日本ではどのように対処してきたか、これまでの経緯をたどってみることにした。これがとりもなおさず表題に対する回答、説明になろうかと思われる。それでは出土中国陶磁の分類に関して重要な指標となった研究を年代を追って見ることにする。またここでは時代をほぼ11世紀から14世紀に限ることとする。なお分類に携わった当事者の考えを見るためできるだけ引用をもって構成する。

1. 白磁と青白磁の境界問題

1.1. 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』1974年

これは「68年来の科学的な発掘により大量の中国陶磁器の出土を見た大宰府史跡の陶磁器分類である。ここで出土した陶磁器は当時すでに数十万点を数えたが、その大部分を占めるのは宋代の白磁・青磁で、江南地方の産といわれている白磁および浙江省を中心に産した龍泉窯系の青磁が最も多く、福建省同安窯系のものがこれについている。他に少数ではあるが、宋代のものとして青白磁、黒釉陶器、褐釉陶器が出土し、また唐、五代のものでは、越州窯系の青磁、邢州窯系、定窯系と考えられる白磁が出土している。さらに長沙窯といわれている黄釉陶器や安南産の鉄絵白磁等もきわめて少数であるが検出されている。」「これらの陶磁器には器形として碗・杯・皿・壺・甕などがあり、その中では碗・杯・皿が最も多く分類・編年の基準となる。そこで、今回、ここでは白磁および青磁のうち比較的出土点数の豊富な碗・杯・皿について分類を試みた」ものである。

「白磁の概念については、一般に素地が白く釉薬が透明になった、いわゆる高火度で、純粋な長石釉のものといわれている」。分類の基準ないし方法についてはこの一般的な概念に従い、胎土、釉調に

注意することは当然であるが、特にここでは、器形の違い、特に底部（高台部）の変化を見ることによって、分類の基本とした。」

以上の原則にのっとり九つの白磁の分類が示された。これらは「奈良時代後半から室町時代前半代まで比較的良く編年がなされている大宰府跡の土師器を中心として」編年を行うこととされた。

11世紀以前に出土するⅠ類はいわゆる北方の白磁である可能性を含むが、11世紀末以降に出土するⅡ類以下Ⅸ類までは、すべて江南の白磁が取り上げられている。中にはⅡ類（黄味が強い）のように黄磁と呼び、Ⅶ、Ⅷ類のように青白磁と呼ぶに相応しいものもあったが、みな白磁と分類されたのである。このとき「黄磁」はともかく「青白磁」という概念が欠落していたわけではなかったが、「青白磁」は景德鎮の特別の製品をさす語として棚上げされ、それより劣る粗製品は青白磁から除外されて、白磁の中に押し込まれたのである。

現場でさまざまな色調、さまざまな胎土の破片を分類するとき器形に重点が置かれたことはよく理解できるところである。この分類案はこの後わが国の出土中国陶磁研究に決定的な影響を及ぼした。そしてこれ以後、われわれの分類における白磁と青白磁の関係はこのようにして決まったのである。

この時、それでは青白磁と青磁の区分はどうかという問題が残っていたはずである。しかし前述のように、この「分類」が大宰府史跡の主要な材料に限って行われたために問題とはならなかった。時代が11世紀までの越州窯青磁、12世紀からの龍泉窯青磁・同安窯青磁と、第一酸化鉄の分量でいえば2%前後を含む分かりやすい青磁だけが取り上げられて分類された。したがってこの時点で白磁と青磁の境界が問題になることはなかった。そしてこの後、宋・元代の青磁は即龍泉窯系・同安窯系であり、それ以外のものは白磁という考えが浸透していったのである。青磁とはとりあえず越州窯か龍泉窯・同安窯であり、それ以外のものは器形的にその系列にあると認められない限り白磁に入れるという手続きができあがったように思われる。

1.2. 東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁』1978年

これは1975年に東京国立博物館が開催した同名の展覧会の図録である。全国的に歴史時代の遺跡の発掘調査が実施されるようになり、出土陶磁の整理に悩んでいた考古学者に一つの指針として大きな影響を与えた。注目すべきは、ここでは青白磁と白磁の区分は困難との認識から、両者をひっくめて白磁と呼ぶことにしたことである。この展覧会の責任者であり、当時学界の指導的立場にあった長谷部楽爾はこの点に関して後に次のように述懐している。やや長いが引用する。「青白磁という呼称は、青磁や白磁の概念と違って地域的、時代的に限定された存在についてのもので、普遍的な磁器の一ジャンルをいうのではない。」「以前『日本出土の中国陶磁』という展示を行った際には、青白磁という標記をやめて、すべて白磁としてしまった。青白磁は白磁の一種とみなしたのである。というのは破片を取り扱う場合、器形のはっきりしない破片があって、白磁・青白磁の区別がつけにくい。それならいっそのこと区別しないでおこうということで、白磁に統一したわけである。」「白磁との関係はそれで解決したが、灰色のもの、黄色のものは問題が残った。それらは中性焰、酸化焰で焼き上げられたものだった可能性があると思われた。素地の色を問題にしてみても、素地のかなり白い青磁というものもないわけではない。連続した存在の一方を青磁、一方を白磁と断定するような客観的な基準というものはありそうもない。青磁、青白磁、白磁の三者はある部分で確かにつながっている、そう考えざるを得なかった。」（長谷部楽爾、「青白磁雑考」『宋元青白磁』、中国陶瓷全集16、月報 No. 15, 1984.）これは現場の研究者がまさに悩んでいた問題であったことから、広く共感を呼び、このころから、日本では「江南の白磁」の語は青白磁的なものをも含んですっかり定着した感がある。以後これについての議論は影を潜めた。

1.3. 『貿易陶磁研究』 No. 2 1982年

ここでは14～16世紀の日本出土の貿易陶磁の編年について特集し、白磁（森田勉）、青磁（上田秀夫）、染付（小野正敏）などの論文が掲載された。大宰府史跡の遺物ではカバーできなかった時代の陶磁器、多くは各地の城館跡の調査で出土した陶磁器に光を当てたもので、先の大宰府の研究と合わせて、「日本出土中国陶磁の分類と編年」の通史的な骨組みがここで大まかに出来上がった。ちなみにこのいわば後半期出土の中国陶磁の分類でも白磁や青磁については周知のこととして改めてその定義が問題にされることは無かった。本稿に関連する13・14世紀の白磁としてはA群、いわゆる「口禿げの白磁」13世紀中ごろから14世紀前半、B群、「枢府タイプの白磁」14世紀、景德鎮。C群、本稿でピロースクタイプⅢ類としたもの、15世紀。おなじくⅡ類に設定したものにも触れている。D群、現在では邵武四都窯の製品とされる白磁、14世紀後半～16世紀。それにE群15世紀後半～、などが設定された。A群は従来から大宰府分類にあったⅨ類と重複するが、B～E群はそれに後続するものである。白磁では種類に変化が見られるが、青磁は依然龍泉窯で占められている。

1.4. 国立歴史民俗博物館『日本出土の貿易陶磁』全5巻 国立歴史民俗博物館 1993年

1990年・91年までに文献で報告されたものについて調査し、報告書を刊行するとともにコンピューターに入力し、データベースとして公開したものである。これは全国の研究者を動員して、全国の資料を共通の基準にのっとり分類し、情報が共有されることを目標とした大事業であった。ここで用いられた分類は上述の分類を踏襲しており、この事業に至ってわが国の出土中国陶磁の分類は確定したといってもよい。以後、漸次補足と細分を繰り返しながら今日に至っている。

しかし14・15世紀は大宰府ばかりでなく本土では中国陶磁の出土が減少することもあって、この時期の出土陶磁研究が取り残されてきた観がある。第1章第3節の『貿易陶磁研究』も十分な資料がないまま国外の資料を多く援用していた。この時期には中国との貿易の中心が大きく沖縄に移動していたことは周知の事実である。沖縄では主要な陶磁器にも本土とは異なるものがあることは早くから指摘されていた。沖縄で資料が増加するにつれ、沖縄に軸足を置いて分類を積極的に補完することが望まれた。次に、これらのいわば新しい分類要素がどのように扱われてきたか見てみよう。

2. 白磁と青磁の境界問題の浮上

2.1. 石垣市教育委員会 『ピロースク遺跡 沖縄県石垣市新川・ピロースク遺跡発掘調査報告書』 石垣市文化財調査報告書第六号 1983年

沖縄では本土を中心に構築された分類表では解決できない資料が多く出土していた。たとえば81年・82年に行われた石垣市ピロースク遺跡では報告された白磁128片6類の内大宰府分類表に当てはまるのはⅠ類の玉縁口縁（3片）、Ⅱ類の口ハゲ碗（1片）だけである。全体のわずか2%である。第1章第3節でC群としたⅥ類（24片）を入れても28%にすぎない。青磁は白磁とは異なり194片中Ⅲ類（9片）とⅦ類（8片）が大宰府分類にないだけで、全体の89%は既成の分類表で処理できる。つまり青磁は大部分本土と変わらないものが出土しているが、白磁に問題が大きいことになる。

ピロースク遺跡で新たに検出された白磁碗 Va類（13片）、Vb類（73片）にはそれぞれピロースクタイプⅠ類、Ⅱ類との名がつけられた。またⅥ類の無文外反碗は素地、施釉、釉調がピロースクタイプに近似することが指摘された。Ⅲ類の薄手直口碗には青磁にも同形のものがあるとしており、青磁にもⅢ類が設定されている。この報告書でも白磁と青磁の分類が色に基づいていることが分かる。そして器形が同じでもそれだけでは白磁とも青磁とも分類できないと考えたのである。

2.2. 沖縄県今帰仁村教育委員会『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集 1991年

1980年から85年に行われた主郭の発掘調査の報告書である。13世紀末から1665年まで層毎に良好な資料を得て報告されている。ことに14・15世紀は本土で出土が少ないため、龍泉窯の青磁にも新しい形式の資料がたくさんある。白磁には前節で沖縄に多い白磁碗として形式設定されたVa、bのいわゆるビロースクタイプⅠ、Ⅱ類、やⅥ類の無文外反碗、薄手直口碗などのほか内底無釉碗、無文外反碗などが追加された。また薄手直口碗は今帰仁に特徴的なものとして今帰仁タイプと名づけられた。これは灰色の素地に青磁とも白磁とも判断しがたい釉を施釉するとしている。しかし一応青磁の分類からは外され白磁にまとめられた。また無文外反碗は森田C群に該当することを認めた。それらが層的に把握されたことは大きな成果である。

2.3. 長崎県『鷹島海底遺跡』

これは第3章第3節3でも触れているように、元寇のとき、いわゆる『神風』によって多くの元側艦船が沈没した現場と考えられる遺跡である。これまでに出土した陶磁は通常の貿易陶磁とは性格を異にし、既成の分類表には適合しないものが多く、大宰府分類表などではなんとしても処理不能な遺跡である。調査は1980・81年度の文部省科学研究費による調査を初めとして、断続的ながら30年近く行われてきた。調査に携わった顔ぶれもさまざまで、報告書の陶磁器分類も必ずしも一貫しているわけではない。これまでに3つの調査地点で出土した陶磁器について報告がある。陶磁器の数量は多いとはいえないが、従来の標準的な分類に当てはまらないものの割合が大きいことが注目された。

2.3.1. 長崎県高島町教育委員会『鷹島海底遺跡』長崎県北松浦郡鷹島町床浪港改修工事に伴う緊急発掘調査報告書 1992年

7個が報告されているが龍泉窯青磁碗2個と白磁の小皿1個以外は標準的分類表に見当たらない。淡灰黄色ながら同安窯系碗の器形を持つ青磁碗、淡灰色で見込みを輪状に釉はぎする白磁皿、口ハゲの白磁碗は標準的な器形ながら見込みを輪状に釉はぎしており、釉色は薄緑灰色と見慣れない。またわが国ではそれまでほとんど出土を見ないかった徳化窯系の白磁の小皿もある。

2.3.2. 森本朝子「長崎県鷹島海底出土の『元寇』関連の磁器についての一考察」、『法哈囉』第2号、博多研究会、1993年

三里沖海底から採集された7個を紹介している。内3個は次の神埼港で発掘された福建省産青磁と同類でここでも青磁に分類されている。残りの内3個はビロースク遺跡のⅡ類（今帰仁タイプ）に類似しており、ここでも釉色によって2個は白磁、1個は青磁に分類されている。あと1個は白磁の壺の底部である。

2.3.3. 松浦市教育委員会『松浦市鷹島海底遺跡』平成13・14年度 鷹島町神埼港改修工事に伴う緊急調査報告書 松浦市文化財調査報告書 第2集 2008年

ここで報告されている遺物は従来の分類表にある口ハゲの白磁と龍泉窯系の青磁の他、白磁ではビロースクタイプ碗Ⅰが出土していて、森田C群に分類され、また器形に同安窯青磁碗の影響を残す浦口窯の碗が福建省産青磁として分類されている。中に外面に篋で蓮弁を入れるものもあり、これは龍泉窯青磁の影響も重なる青磁であるとする。

以上見るように鷹島海底遺跡は地点によって出土陶磁器に多少の変化があるようであるが、これまでの分類表に当てはまらないものが高い割合で存在する点が共通している。時代を代表する窯（景德鎮、龍泉窯など）の影響をにじませながら影響を1つに絞り込むことが難しく、青磁と白磁の区別さえはっきりしない代物であるが、総じて分類の原則は変わっていないといえよう。

2.4. 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志「沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心に—」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～補遺編』2007年

沖縄に厚く本土や九州、四国で薄い15世紀を中心に、沖縄の資料によってこれまでの出土中国陶磁の分類に補足修正を加えようとした。分類の方法は大綱として先学の研究に沿っており、白磁と青磁の分類も大宰府以来の原則が踏襲されている。

2.5. 田中克子「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号、2003年

この論文は上で見た分類がいずれも消費地の立場で分類したのとは違って、生産地に軸足を置いて分類している。生産地である中国の研究の進展と、日中共同研究の進展にかんがみ、今後の研究の進むべき方向を示した重要な分類である。この論文で筆者は中国と日本で白磁や青磁の概念が相違していることを指摘しながら、自らはおおむね従来の日本の分類にしたがっているように思われる。

3. まとめ

日本における出土中国陶磁の分類は何よりもまず主要なグループを抜き出して整理することから始められた。分類は色や質感を基にするため多分に感覚的にならざるを得ないものであるから、最初は明らかに異なる色や質を示す典型例を中心にグループを設定することが行われたであろう。まずは12世紀以降の白磁、青磁などのいわゆる大分類である。ちなみにこの時代日本では中国北方の白磁はごく例外的にしか出土しない。大部分はいわゆる江南の白磁であり、青磁としては分かりやすい龍泉窯青磁あるいは同安窯青磁だから分類に難しい定義は必要なかったといえる。白磁の名の下には色の薄いものが、青磁としては青みの濃いものが悩むことなく集められた。青白磁の存在は時々浮上したが、それを宋（元）代の景德鎮特有の製品として棚上げすることによって白磁と青白磁の接点を確認することは回避された。その後にはまた白磁と青磁の境界が問題として残ったはずであったが、正面から向き合うことなく、必要が生じた折々に個別に対処されてきた。それは多くの場合、まずは色調によって白磁か青磁に分け、その判別が難しいものについては器形を参考にして帰属を決めているようである。ちなみにこのとき参考にされる器形は現在全国的に最も認知度の高い大宰府分類に基づく標準的な分類表のものである。

このようにこれまで白磁や青磁の定義を議論することなく過ぎてきたことは驚きであるが、反面当然であり、実用的でもあり、賢明なことだったとも思える。定義が範囲を限定するものであるとすれば、それは不可能という以外にないからである。

近年では典型的な白磁や青磁についてはほとんど問題が解決しており、いまだ分類の定まらない、境界近くにある難しい陶磁に研究の手が及んできている。今帰仁タイプなどは白磁もあり青磁もありといながら、伝統的に白磁と呼ばれることが多く、まさに問題の陶磁で、頭の病めることである。

以上述べたように現在我々の用いている分類に内包されている問題点はよく認識されており、しばしば内部でも議論をよんでいるが、これがすでに広く用いられていること、それに何よりも改良の妙案がないことから変更されること無く現在に至っている。将来日中の合議によって全面的な分類の見直しが行われる可能性もあろう。しかし、連続する線を何処で切るかというどだい無理な作業が根底にある仕事であるから、双方が相手の基準を理解できればあえて統一の必要はないとも思われる。

以上の経緯から現在日本の貿易陶磁研究の学界では、この度我々が問題としている中国陶磁をピロースタイプはもちろんのこと、今帰仁タイプをもみな白磁と呼んできたのである。しかし美術史や、工芸関係では分類概念も異なるところがあると思われ、その限りではない。

文献

内藤 匡 1975 「酸化第一鉄と青磁」『新訂古陶磁の科学』雄山閣, pp. 149~166

長谷部楽爾 1984 「青白磁雑考」『宋元青白磁』、中国陶瓷全集16, 月報 No. 15, .